シンガポールにおける団地研究史の再検討

鍋倉　聰

はじめに

「シンガポールの豊かなメルティングポットに、訪問者は、華人、マレー人、インド人の文化が時には同じ街角にあるのを見ることができます！」

これはシンガポールの絵葉書の説明文を直訳したものだが、シンガポールの二つの特徴をよく言い表している。一つは、シンガポールが「華人」「マレー人」「インド人」等から成る多人種・多民族国家であること。もう一つは、これらが「同じ街角にある」ことである。人口統計によれば、シンガポールは、77%の「華人」、14%の「マレー人」、7.6%の「インド人」、1.4%の「その他」から成り立つ（MITA1999: 34）。「多人種国家」として知られる所以である。重要なのは、政府自らが各「人種」[1]間の違いを強調していることだ。シンガポールでは、「華人はより華人に、マレー人はよりマレー人に、インド人はよりインド人になるような圧力の下に置かれる」（Benjamin1976: 124）。こうした一連の政策は「多人種主義」[2]政策と呼ばれ、現在シンガポールにおいて、あらゆる分野で行われている。

シンガポールは、また、住民の約86%が団地に住む（MITA1999: 179）団地国家でもある。この団地も、「多人種主義」政策の全面展開と無関係ではない。団地に関して、人種の割当て政策が行われているのである。団地を分譲する際、人種別の割当てが予め決められているほか、自分の所有する団地フラットを転売する際にも、人種別に細かく定められた割当て[3]に従わなければならない（Ooi1993: 4-24）。その結果、シンガポールの団地では、多人種が「同じ街角にある」先の絵葉書のような状態が演出されるのである。

しかし、この演出には住民の大きな犠牲が伴う。例えば、ある家族が自分の所有するフラットを「マ

[1]シンガポールでは、“Ethnicity”ではなく、“Race”という語が、役所・民間を問わず幅広く用いられている。本稿では、このシンガポールでの用法に従い、その訳語である「人種」という語を「エスニシティ」と同義で用いる。シンガポールで敢えて「人種」という語が用いられている背景には、この語から想起される血統性・超越不可能性の果たす大きな役割が考えられる。

[2]「多人種主義（Multiracialism）」に関しては、Benjamin（1976）を参照。

[3]近隣区では、マレー人22%、華人84%、インド人及びその他8.2%、団地の各棟では、マレー人25%、華人87%、インド人及びその他13%と、上限が定めらている（Ooi1993: 12）。

レー人」の知り合いに売却することを希望しても、それは認められない。なぜなら、彼らの住む団地の建物には「マレー人」家族がすでに28%住み、25%という「マレー人」の割当てを既に超えているからである。団地における人種割当て政策は、人々のもつ財産権や居住地選択権等の基本的な権利を侵害しかねない強権的措置なのだ。

こうした強権的措置の実施が可能な背景には、先に挙げた86%という高い団地居住率がある。団地の事実上の全般的な供給によって、団地は政治的に論議がないように見せかけられるのである（Chua 1995: 127）。現在、団地は、シンガポールの人々にとってごく当たり前の生活環境となり、テレビドラマや映画では、日常生活の舞台・背景として、団地がごく自然に用いられている。

しかしながら、これら言わば「国民総団地居住化」は一朝一夕に成し遂げられたわけではない。HDB[4]が設立された1960年には、団地生活者は人口の9%で（MITA 1999: 179）、大多数の住民は、都市部のショップハウスやスクァッター地区、農村部のカンポン[5]に居住していた。今日のような団地の広まりは、主にHDB設立以降約40年間のプロセスの代物なのである。この間、団地をめぐり様々な出来事があった。政府による強制撤去、より「近代的な」「良い」暮らしを求めてさまよう人々の姿などである。そして、エスニシティをめぐる論議など様々な議論が現われ、消えていった。

これら議論については、主にシンガポールの研究者によって取り上げられてきた。しかし、シンガポール以外では十分に取り上げられてきたとは言えない。そればかりか、シンガポールの研究者による研究も、シンガポール以外では顧みられてこなかった。それは、議論そのものに魅力がないからではない。シンガポールは言論・研究に制限が多く、研究活動を十分に行えず、魅力的な研究は乏しい、と見なされることが多いためである。しかし、私はこうした考えをもたない。言論・研究の自由に制限があるにせよ、彼らの研究を注意深く読みこめば、制限を越えた様々な魅力的な点があるからである。

本稿では、シンガポールにおけるHDB団地に関する社会学的研究を取り上げ、約40年間の団地経験の間に現われた論議に注目する[6]。様々な議論のうち、とくにエスニシティをめぐる議論に焦点を

---

[4]Housing and Development Boardの略で、邦訳すれば「住宅開発庁」になる。リークアンユー率いるPAP（People's Action Party＝人民行動党）が政権を獲得した翌年（1960年）に、SIT（Singapore Inprovement Trust＝シンガポール改良信託局）にかわって設立された。単に団地を建設するだけでなく、土地収用や住民の移転、都市計画などにおいて強大な権限が与えられたHDBは、その権限を全面的に行使し、強力に団地建設を進めて現在に至っている。

[5]シンガポールの都市部では、1階を店（ショップ）、2階以上を住居（ハウス）とする「ショップハウス」が基本的な住居形態であった。また、「カンポン」は、元々は村を意味するマレー語だが、シンガポールでは農村・漁村を意味する語として言語を問わず広く用いられている。

[6]本稿では、「シンガポールにおけるHDB団地に関する社会学的研究」として、研究当時シンガポールで研究職に就いていた者による研究のみを取り上げる。シンガポールに関しては、シンガポール外で発言するのと、シンガポール内で職を賭して発言するのとでは、その重みが違うからである。

当てる。「多人種主義」は、団地と並ぶシンガポール最大の特徴であるだけでなく、先に述べたように団地そのものとも密接に関係しているからである。ここからシンガポールの40年にわたるHDB団地経験の一側面を明らかにし、その経験を踏まえた上で、HDB団地研究を「多人種主義」さらには多文化主義を踏み越える方向に進めていくことが、本稿の主題である。

1．シンガポールの団地と社会学

シンガポールの社会学者は、団地を巡るプロセスの外側に立って研究してきたわけではない。1960年代末には、すでに団地プログラムにおいて社会学者の果たすべき重要な役割が自覚されていた。1968年から「シンガポール共和国の土地利用及び交通網計画プロジェクト」に参加していた社会学者ウェスタンは、自らの役割を「計画のプロセスに社会学的な考え方を吹き込むことである」とし、団地建設を中心とする都市計画を有効に進めるにあたって、社会学が欠かせないことを主張した（Western1970: 49-50）。

都市計画における社会学の重要性を主張したのは、ウェスタンのような政府のプロジェクトに参加していた者だけではない。当時、政府の開発の非人間性を批判していたテイ（Powell 1997:18）もまた、次のように述べている。

> 「［団地をめぐる］諸問題に答えるにあたって、社会学者の役割は決定的に重要である。そして、その役割は、我々の団地プログラムの次の段階において欠かせない」（Tay1969: 28）。

社会学に対しては、政府・反政府両方の立場が共通して大きな役割を課していたのである。

一方、社会学の側からは、団地をどのように位置付けていたのだろうか。シンガポール大学に社会学科が設立されたのは、1965年だった[7]。この生まれたばかりの新学科にとって、団地は格好の研究対象であった。社会学科設立の4年後の1969年に、創生期のスタッフのハッサンは、「シンガポールの団地におけるいくつかの社会学的な意味」という論文で、次のように述べた。

> 「大量の公共住宅の発展には、大きな社会学的な意味が含まれている。コミュニティの組織及び構造、中での集団関係、フラット住民の政治参加、他者に囲まれた中での家族の構造及び機能である。．．．これらは、現地の社会学者にとって、大きな関心の対象になるに違いない」（Hassan1969: 24）。

団地側から社会学の研究を必要としていただけでなく、逆に社会学者の側からも、団地を格好の研究対象として捉えていたのである。両者の「利害」が一致した結果、HDB団地の社会学的研究は盛んに行われるようになった。

---

[7]社会学科の歴史が浅いのは、シンガポール大学がイギリスの大学のやり方に従っていたためだと思われる。

2．初期（1960年代～1970年代）の研究

2－1．初期の研究における二つの立場

シンガポール団地が重要な社会学的意味をもっていることをハッサンが指摘したことは、先に述べた。その帰結の一つとして一番最初に挙げたのが、エスニック関係であった。

「［シンガポールの］コミュニティ組織の基礎は、大部分がエスニック的な社会関係であった。．．．団地は、こうしたエスニシティ別の隔離状態を解消するにあたり、重要な役割を果たす。団地の取得条件は、市民権、収入、家族の大きさであって、エスニック関係や人種関係ではない。したがって、団地は、［エスニシティ別の］隔離状態を解消したコミュニティであり、そこでは、華人、マレー人、インド・パキスタン人、ユーラシア人が、隣り合って暮らすのである」。

「現在利用できる限られた印象的な証拠から分かるのは、団地は、シンガポールにおける文化変容の過程に貢献する、ということである。また、エスニック境界に沿った分裂は、社会変動の過程で重要でなくなるであろう」。

「団地における社会変動の過程で、エスニシティの区別が重要でなくなる一方、収入に基づいた区別がより重要になるようだ。この変化は、産業社会・近代社会において首尾一貫している。そこでは、『地位』による関係に『契約』による関係が取って代わり、『所与の』地位よりも『獲得した』地位が重視されるのである」（Hassan1969: 24-25）。

こうした「エスニシティの区別が重要でなくなる」とするエスニシティ観は、当時隆盛をきわめていた近代化論として捉えることができる[8]。

しかし、ハッサンは、近代化論的な捉え方をする一方で、次のようにも記した。

「しかしながら、だからといって、公共住宅団地でのエスニシティが、衝突状況において結節点でなくなる、というわけではない。実際、エスニシティは、象徴として、衝突の潜在的な資源であり続けるであろう」。

「団地のまた別の社会学的な帰結は、古いコミュニティの連帯への衝撃である。団地への移転の過程は、社会のまとまりや統合の新たな基礎を供給せずに、コミュニティの連帯の古い基礎を壊している。．．．団地の物理的配置によって、住民どうしのコミュニケーションが抑制されている。団地住民は、多くの場合、上下に住む人あるいは同階に住む人すら知らない」。

「閉じられたドアの背後では、各フラットが少数の人々を閉じ込めている。少数の人々は、その隣人のことを比較的知らない」。

「社会統制と逸脱の問題は、また、団地の比較的非人間的な環境によって、より複雑になる。以上が、

---

[8]「近代化論」とは、近代化にともない、エスニック集団は、より高次のネイションに一元的に統合され消滅して西欧型の「ネイション－ステイト」に統合されるという考え方である。1960年代に隆盛をきわめ、言わば常識となっていた（李1985: 191-192）。

シンガポールの団地のもつ主な社会学的な意味である」（同 25-26）。

ここでは、一転して、団地の非人間的な環境や団地住民の隔離した生活など、団地での新しい生活の実態には様々な問題があることが指摘されている。

前者のエスニシティに対する楽観的な近代化論と、後者のような団地生活の実態の間で、ハッサンの記述は揺れている。団地で実際に目の当たりにした生活は、当時主流だったエスニシティ理論での議論とあまりに食い違っていたのである。この揺れに、当時急激に進んでいた変化に対する期待と不安を見て取ることもできる。しかし、この揺れは、ハッサンだけの揺れではない。当時のシンガポールには、団地での生活について二通りのアプローチがあった。一つは、エスニック統合が進むなど、団地生活を楽観的・肯定的に捉える立場であり、もう一つは、団地で住民が生活していくにあたって実際に抱える問題を重視した結果、団地生活を悲観的・否定的に捉える立場である。ハッサンの記述の前者と後者には、二通りの捉え方の各々が反映されている。ハッサンの記述の揺れは、二つの捉え方の間の揺れなのである。

本稿では、前者のように団地生活を楽観的・肯定的に捉える立場にたつ研究を「Aの立場の研究」、後者の立場にたつ研究を「Bの立場の研究」とし、これら二通りに分けて、1960年代から1970年代にかけての論文を取り上げていく。

2－2．Aの立場の研究

1968年に、HDBとシンガポール大学経済研究センターが共同で、大規模なHDB団地住民の標本調査を行った。1960年代に大規模な団地建設が進められたことで、さらなる計画のために社会経済的な質的データの必要性が高まったためである（Yeh et al.1972: 3-4）。この調査の結果を、イェらは次のように述べた。

「［団地に住むことによる］変化への満足度に関して、データが示すのは、満足度が一般的に非常に高いことである。．．．70％近くの世帯が、生活が非常にではないにせよある程度良くなった、という考えを示している。前と同じは18％、悪くなったと答えているのは、約12％にすぎない」。

「［団地への］移転前後の生活状況及び生活を全般的に比較して、58％が、生活が非常に良くなったではないにせよ良くなったと答えている。変化を取るに足らないとしたのが22％、変化を悪く捉えたのは19％にすぎない」。

「調査結果が示すように、団地への満足のレベルが意味するのは、HDB住民の圧倒的大多数にとって、団地への．．．移転に必要な適応は、それほど困難でなかった、ということである」（同 197-201）。

イェらの報告では、団地での新しい生活に多くの住民がうまく適応し、その新生活に「満足」していることが、強調されている。

これ以外にも、トレローらは、同じデータを用いて、満足を形作るにあたって重要な役割を果たす

要因を明らかにしようとした。そこでは、住宅への満足を形作るのは、隣人との社会関係、フラットの大きさと位置、移転の経験の仕方、移転後の生活状況の捉え方であって、職業やエスニック集団、方言集団などの変数は、わずかな重要性しかもたない、とした。そして、住宅への満足に対してエスニシティの働きが小さいことは、団地での比較的調和したエスニック関係を示唆している、と述べた（Treloar , Western & Yeh1970: 1, 16, 17）。

このような類の研究は、他にもある。ヨンは、団地住民の買い物等の行動パタンに注目し、地元で買い物する傾向があることから、「近隣意識は、収入の違い、エスニック構成、年齢構成、団地の大きさの領域を超越（横断）しているのである」という結論を導き出した（Yeung1970: 11-19）。

Aの立場にたつ研究の問題点を指摘するのは、容易だ。イェらの報告では、団地での新しい生活に対する住民たちの「満足」が強調されている。しかし、果たして何に対する「満足」なのか。この調査で取り上げられている「満足」とは、フラットの大きさ、団地における施設・設備、職場や学校への便利さに対する「満足」に過ぎない。こうした物理的な環境を超えた人間関係や愛着などに関する満足は、考慮されていないのである。

また、ヨンの論文の結論は、「さらに分析を進め」た上での結論だとされている（Yeung1970: 19）。しかし、どこで「分析を進め」たのか明らかにされていない。とくに、「エスニック構成」が取り上げられているのは、最初の調査地選定のところと、結論部分だけである。分析どころか途中で言及さえされぬまま、「分析」されたことになって、結論が導き出されている。これでは、最初から答え・結論が予め決められていた、と批判されても致し方ないだろう。

この他にも、前二者の基となった調査は、標本調査とされていて、一見、調査対象の選定に問題がないようである。しかし、回答者のうち華人が90％を占め、マレー人とインド人は各5％にすぎない（Yeah et al.1972: 193）。マレー人の割合が極端に少ない。トレローらは、こうした華人マジョリティ中心のデータに基づいて、「住宅への満足に対してエスニシティの働きが小さい」と結論付けているのである。これでは、マイノリティにとっての「エスニシティの働き」は、十分考慮されているとは言えない。

また、そもそも、回答の信憑性にも問題がある。前二者の場合、HDB＝政府が前面に出た調査である。調査の前には、新聞や放送などを用いた大宣伝が行われた（同1972: 7）。そこで、「団地生活に満足しているか」と問い詰められた団地住民は、果たしてどう答えるのか。気弱な住民は、思わず首を縦に振ってしまうだろう[9]。

以上挙げた問題点を一言でいえば、団地に対する住民の満足、調和したエスニック関係、従って団地プログラムの成功という結論が予めあり、現実分析をそれに合わせてしまっているのである。

---

[9]こうした政府主導の大規模調査の限界は、後で取り上げるようにハッサンも指摘した（Hassan1977: 56）。

しかし、以上のような問題があることは、シンガポールにおける研究状況を考えれば、容易に想像できる。容易に想像できるあまり、シンガポールにおけるシンガポール研究に対する関心が薄れるという結果になってきた。当時のシンガポールにおける団地調査で重要なのは、団地生活を別の角度から捉えたBの立場の研究が存在したことである。これは、団地で住民が生活していくにあたって実際に抱える問題を重視する「嘆きのHDBフラット」の立場の研究だと言えよう。

２－３．Ｂの立場の研究

Ｂの立場にたつ研究の特徴は、結論よりも団地での生活の実態を重視していることである。そして、団地で生活している住民の抱える様々な問題を、率直に指摘する。ここでは、バハリンらの研究とハッサンの研究を取り上げる[10]。

バハリンらは、団地に移転させられたマレー人家族について研究を進めた（Baharin, Dahlan & Vasoo 1971: 20-23）。彼らがとくに焦点を当てたのは、「環境の変化に適応するのが大変で、新たな生活水準の獲得において他の後塵を拝した」家族である。彼らは、次のような実態を明らかにした。すなわち、「以前の住居がどんなに貧しくて古くても、住民はそこを去るのを嫌がった」こと。「自分の四つの壁の中に閉じこもって、カンポンの自由気ままな生活がもはやないのを残念に思う」住民の姿。「団地で暮らすことは、マレー人家族にとって、異なったエスニック的宗教的背景をもつ人々がすぐ近くにいる」ことであり、「マレー人の老人にとって、この要因の影響は甚大である」こと。例えば、「豚肉が料理される際の臭いを怖れる。その臭いがフラットに入ってきて、自分たちで料理しているかのようになることを怖れる」こと。「団地に移ることによってもたらされた変化によって」、「カンポンにあった密接さ･連帯感が…失われてしまった」こと。「かわりに、団地にあるのは、不安感、不信感、怖れ、不十分感である」こと。「マレー人にとって、宗教と教育が渾然一帯だったのだが、団地ではその機会は失われた」こと。「現在そして未来のコミュニティへの参加は、団地が家族の集まりを阻害する新しい文脈では出来そうにない」こと。「マレー人家族が、コミュニティが組織されないことによって一番打撃を受ける」こと。「昔のコミュニティの連帯が．．．なくなっていく一方で、新しい社会的まとまりや統合の基礎は不十分」なこと。「マレー人家族の少ない［5～10戸の］ブロックでは、他の集団への関与は、浅く形式的なものである」こと。「加えて、フラットの住居の物理的配置が、隣人間のコミュニケーションを邪魔する」こと。「あるブロックに住むマレー人家族が、上下に住む隣人そして同階に住む隣人さえも知らない」こと。「こうした環境的な状態が、社会的阻害の過程において重要な役割を果たし、アノミーを生み出す」こと。「マレー人家族は、［自分たちの住むブロックの住民ではなく］自分たちのブロックからはるか遠くに住む別のマレー

[10]このほかにも、シンガポール大学の卒業論文・修士論文などがある。本稿では取り上げられなかったが、学生のもつ機動力を活かした論文が多くある。

人家族に一体感をもっている」こと、などである。形容詞の使い方が印象的だ。この論文からは、マレー人問題が当時の深刻な問題であったことが、生き生きと伝わる。また、マレー人家族と他のエスニック集団を比較する視点が取られていることも、この論文の特徴である。

こうした立場の研究が結実したのが、ハッサンの研究（Hassan1977）である。彼は、シンガポール大学の学生をつかって比較的大規模な質的調査を行い、団地生活の現実を明らかにした。彼が取り上げたのは、団地住民の人間関係、フラットに閉じこもりがちな生活、エスニシティ、自発的移転者と非自発的移転者の比較である。

まず、団地住民の人間関係であるが、当時、団地では新たな住民関係が形成されることが期待されていた。しかし、実際には、「多くの団地住民にとって、血族及び友人との接触はそのまま変わらない」ことをハッサンは明らかにした（同 63-69）。団地への移転後も、移転以前の人間関係がそのまま続いていたのである。一方、隣人の果たす役割は、移転前後で大きく変化した。

「［移転前とは対照的に、］移転後の隣人への依存は、非常に低い。さらに注目すべきなのは、［移住してから］2年以上経つのに、以前の隣人に頼り続けていることである。．．．以前の隣人は、依然として、重要な役割を果たし続けていて、家族の友人としての役割が求められている。．．．［対照的に］現在の近隣においては、隣人の役割は減少し、．．．それは劇的である。．．．［現在では］ごく少数の者しか、より親密で濃い近隣の相互作用を行っていない。大多数にとっては、相互作用は低レベルにとどまる傾向にある」（同 67-69, 101）。

フラットに閉じこもりがちな生活としては、「外中心の家族活動が減少しフラット中心の活動が増加する傾向にある」ことをハッサンは指摘した（同71）。これ以上に閉じこもりがちな生活が現われているのが、子供の生活である。

「子供たちは、『外の悪い子供』と混ざらないよう、フラットの中に閉じ込められることが多い。建物の共有の廊下で遊ぶことが許されるのは、ごくたまにである」（同74）。

「6～10歳の子供は57％しか家の中で遊ばないのに対し、1～5歳は64％である。．．．6歳以上の子供を持つ大家族の親に尋ねると、．．．子供がフラットの中で遊ぶのを好んでいた。なぜなら、外は『悪い要素で一杯』で、子供に望ましくないことを教えるからである」（同136）。

以上から、親は子供たちが外で遊ぶのを好ましく思っていないことが分かる。ハッサンは「57％しか（only 57 per cent）」と記しているが、「57％も」と考えた方が適切だろう。小学生になったにもかかわらず、多くはフラットから外に出て遊ばないのである。一部屋か二部屋の狭いフラットに大人数で住んでいるにもかかわらず子供を外で遊ばせないのは、団地住民が外の世界を「悪い」ところとして危険視しているためである。ハッサンは、こうした危険視が生じる原因を、先に述べた隣人との関係の薄さと合わせて、「コミュニティの喪失」に求め、次のように警告する。

「コミュニティの喪失は、満足な暮らしのために奮闘している住民には、それほど障害にはならない。

しかし、住民が自分たちを組織できなくなり、自分たちの新しい環境の維持に参加できなくなり、そのかわりに自分たちの共通の問題に無関心になった時に、深刻な障害となる」（同 141-144）。

エスニシティについては、エスニック間関係が少ないことを明らかにした。まず、「フラットへの移住後、違うエスニック集団のメンバーとの接触に変化が生じたのか尋ねた」ところ、「約62%が変化なし、24%が増加、12%が減少と答えた」（同 76）。まさに回答者の四分の三が、変化なしか減少と答えているのである。これは、団地への移住によってエスニック間関係が高まる、と謳うHDBの宣伝に対する疑問視だと捉えることができる。さらに、「異なったエスニック集団に属する隣人間の近隣相互作用と、こうした接触の範囲についても調べてみた」結果、「エスニック間の近隣の接触は、一緒に外出したり個人的な問題について話し合ったりするレベルでは、ほとんどない」ことが明らかになった。「回答者の過半数が、エスニックの境界を越えた近隣の相互作用について、全く何も行っていない。行っていたとしても、1軒か2軒にとどまる」のである（同 102-105）。

ハッサンは、また、研究全体を通して自発的移転者と非自発的移転者[11]の比較を行い、団地住民の姿を立体的に捉え、さらに「精神医学的なストレス」にまで言及した[12]（同131）。とくに、自主的移転者が興味深い。自ら変化を求めてシンガポール中の団地をさまよう、これらの人々[13]は、シンガポールの40年間の団地プログラムを解釈していくにあたって鍵となり得るだろう。

しかし、こうしたBの立場の研究だけが真実だ、というのではない。Aの立場の研究で結論付けられたように、団地での新しい生活に素朴に満足している人が、実際に大多数だったのかもしれない。私が言いたいのは、Bの立場にたつ研究の、アンチテーゼとしての重要性である。この時期のシンガポールでは、Aの立場の研究のような言わば官製の研究に対して、それに対抗するアンチテーゼとしての団地研究が行われていた。そして、このアンチテーゼとしての重要性は、自覚して行われたのである。ハッサンは、官製研究の限界を批判して、次のように述べている。

「こうした［官製研究の］データは、移転及びその結果の実際のダイナミックスを理解する際、限界がある。これを最もよく理解できるのは、小規模のケーススタディである。．．．こうした［ケーススタディでの］調査結果は、Yehらの報告した［官製研究の］調査結果［Yeh et al.1972］とは食い違っている」（同 21-23）。

また、ハッサンは、政府主導の大規模調査の集める回答に問題があることを指摘した。

---

[11]非自発的移転者とは、都市再開発などによって団地に強制的に移住させられた者のことである。これに対して、自らの希望で団地生活を選択した者が、自発的移転者である。

[12]一見何気ない言及のようだが、シンガポール政府がストレスを精神医学的に見ることをしなかった（Chua1997: 165）ことを考え合わせると、この言及は意味をもつ。

[13]これらの人々について、ハッサンは、「トランジッション・シンドローム」として、別稿で論じている（Hassan1976）。

「データによれば、HDB役人に対する満足度が［90%前後と］高いにもかかわらず、フィールドワークでの観察や回答者の頻繁なコメントが指すのは、有意味な接触の欠如、そのサービスへの不満足である。また、回答者がよくするコメントが指すのは、HDB役人との接触をできるだけ避けようとする傾向があることである。回答者の一般的な志向は、怖れと忌避だ」（同56）。

住民が「模範回答」を熟知しているHDB団地では、単に統計を取るだけでは意味がない。丹念な調査、まさにBの立場の研究が欠かせないのだ。

しかし、Bの立場にたつ研究は、以後シンガポールにおいて見られなくなってしまった。これは、シンガポール政府によるHDB団地研究の一元化にほかならない。

この時期、一元化が行われたのは、HDB団地研究だけではない。政府が進めていた各方面での一元化が、完成しつつあったのである。その例をいくつか挙げる。

シンガポールには、英語で講義を行うシンガポール大学と華語で講義を行う南洋大学の二つの大学があった[14]のだが、1980年に、二つの大学が「統合」され、シンガポール国立大学（NUS）が設立された[15]（Turnbull1989: 301）。

新聞に関しては、1971年に、「南洋商報」の編集委員が逮捕されたほか、「Eastern Sun」及び「Singapore Herald」の二紙が廃紙に追い込まれた。1974年と1977年に新聞発行法が強化された後、1982年以降、政府主導の下で新聞社の編成が行われた。二大華語新聞社（「南洋商報」及び「星洲日報」）が統合され、発行紙も「（南洋・星洲）聯合早報」になった。さらに1984年には、「Straits Times」グループ[16]と併せて「Singapore Press Holdings」社が設立され（Turnbull1989: 308-309,320）、シンガポールの新聞社は、事実上この一社のみとなった。

言語・教育に関しては、1978年以降、「スピーク・マンダリン[17]（華語を話そう）」キャンペーンが始められ、多様な方言をマンダリンに統合する試みが行われた。教育制度も、1983年、英語で授業を行い「母語」[18]を必修選択第二言語とする制度に一元化された[19]（PuruShotam1998: 70-71）。また、複数あったバス会社までが、1973年にSBS（シンガポール・バス・サービス）一社に統合された。

---

[14] 1983年まで、シンガポール華人は、英語で教育を受ける者と、華語で教育を受ける者に分かれていた。前者の最高学府がシンガポール大学、後者の最高学府が南洋大学であった。

[15] これは事実上、南洋大学の廃校を意味する。シンガポール政府は、早くも1960年から南洋大学の校勢を衰えさせるべく、様々な手を打っていた（Turnbull1989: 301）。その理由を一言でいえば、南洋大学には、政府に反抗的な生徒や教員が多かったためである。

[16] 当時「Straits Times」グループは、英語紙「The Straits Times」及びマレー語紙「Berita Harian」などを発行していた。

[17] 中国北方の言語を基につくられた「標準華語」のこと。シンガポール華人の大多数が中国南方の出身者及びその子孫であり、「スピーク・マンダリン」キャンペーンが開始された当時、中国南方諸語（福建語、潮州語、広東語など）が広く日常会話に用いられていた。マンダリンと中国南方諸語は「外国語」のように異なり、中国南方諸語も、福建語と潮州語以外は各々全く異なる。

HDB団地研究の一元化は、こうした一連の流れの一部だと見なすことができる[20]。

この結果、HDB研究は、政府公認のチャンネルでしか認められなくなった。1975年と1985年に、HDB自身によってHDB団地の総合的な研究書が出版された（Yeh(ed)1975及びWong & Yeh(eds)1985）が、これは、まさにHDB＝政府によるHDB団地研究の一元化を示している。これら総合的研究書以外の立場の研究が、シンガポールでは行われにくくなったのである。「一元化時代」を迎え、団地研究は新たな段階に達した。次章では、HDB自身による二冊のHDB研究書をもとに、一元化時代のHDB団地研究の特徴を明らかにする。

3．一元化時代（1970年代後半～1980年代）の研究

3－1．1975年の研究書

本書は、「シンガポールの団地に関する初めての包括的な報告」である（Lim1977:11）。本書の中では、チャンの研究（Chang Chen-Tung 1975）が最も優れている。内容は、「より村的なタイプの近隣」であり「古くてすでに出来上がったスクァッターコミュニティ」であるウッドランド[21]と、団地との比較である（同282）。

彼は、ウッドランドが、「人口はまばらながら、非常に混ざり合ったコミュニティで、華人、マレー人、インド人、そして少数のユーラシア人が、一緒に暮らしている」こと、「［このように］不均質なエスニック集団・方言集団から成るにもかかわらず、地元のリーダーが力を込めて言うように、『平和で調和した』コミュニティである」こと、「農業に従事しているのは、全世帯の3%だけで、男の所得者は、ほとんどが、第二次産業・第三次産業に従事している」ことを明らかにした（同281-283）。これは、ウッドランドのような村落ではエスニック集団別の集住が進み、住民は農業に従事している、という思いこみが事実でないことを示している。思いこみを裏付けることに終始している他のスクァッター研究（Chang Yong Ching1970など）とは違った優れた点である。また、彼の指摘は、不均質なエスニック集団から成るコミュニティは、政府が管理しなければ平和や調和は維持できないとするシンガポール政府の宣伝に対する反論とも読み取ることができる。

---

[18]ここで言う「母語」とは、華人＝マンダリン、マレー人＝マレー語、インド人＝タミル語を意味し、実際の母語とは一致しない。

[19]この制度に落ち着くまで、シンガポールでは言語と教育に関する複雑な経緯があった。その経緯については、PuruShotam1998を参照。

[20]団地研究の一元化という学問分野の一元化を、バス会社の統合などと同列に扱うことには、問題があるかもしれない。しかし、学問の一元化までがバス会社などの一元化と同列に扱われてしまうのが、まさにシンガポールなのである。こうした文脈を鑑みれば、本項で取り上げた「嘆きのHDBフラット」の立場のもつ意義が、より一層明らかになるであろう。

[21]シンガポール最北部の、マレーシア対岸の一帯。

また、ウッドランドでの近所付き合いは、意外と淡白である。

「近所付き合いは、挨拶の交換を除き、隣人のうち小規模な仲間内で行われている。それは、5軒以下であることが多い。．．．物の貸し借りや個人的な問題について話し合うことは、近隣によくあることではない。．．．こうした［物の貸し借りなどの］活動は、近隣において、隣人の役割期待を超えると見なされている」（Chang Chen-Tung1975: 284）。

これもまた、ウッドランドのような村落では人々は人間関係に縛られた生活をおくっている、という思い込みが正しくないことを示している。

彼は、さらに、近所付き合いの仕方の多様性を次のように明らかにした。

「近所付き合いの仕方においても、エスニシティ別の違いがある。．．．挨拶及び社会的訪問の交換や一緒の外出において、マレー人の方が、華人やインド人よりも近所付き合いをする傾向がある一方、比較的多くのマレー人が、隣人の誰とも物の貸し借りや私事の相談を行わない。［これに対して、］華人は、一般的に、近所付き合いを通して広い社会的なつながりを発達させるようなことをしないが、物の貸し借りや私事の相談については、マレー人などよりもよく行う」（同284-285）。

この指摘が重要なのは、「近所付き合いには、社会的訪問の交換の他にも様々な側面がある」と指摘することで、HDBによる1973年の団地調査に対する批判となっているからである。その団地調査では、近所付き合いとして社会的訪問の交換しか取り上げられなかったことから、次のような問題が生じた。

「［団地調査では、］団地近隣における様々な［エスニック］集団が、ウッドランドで見たように、近所付き合いの諸側面別にどのように多様なのか、見ていくことができない。．．．様々な種類の近所付き合いは、各エスニック集団にとって、各々別の社会的意味を体現する。一種類の近所付き合いの検証に基づいた、様々な近隣性のうちの一パタンは、違った種類の近所付き合いが見られるところでは、全く異なることがあり得る。たった一つの近所付き合いの分析にのみ基づいて近隣性の比較研究を行うのは、明らかに不当だ」（同289, 297）。

これは、HDBによる団地調査に対する批判であるだけでなく、その調査に基づいて行われた本書の研究全体に対する批判でもある。実際、本書の研究の多くが、HDB調査を批判せずそのままそれに基づいて行われた。このため、これらの分析は、底が浅いものになってしまったのである。チャンも、ウッドランドに比べてHDB団地の分析は十分でない。例えば、彼自身述べているように、近所付き合いの分析において、幅広く分析したウッドランドでの調査とは違って、社会的交換しか取り上げていない。

それでは、本書の彼以外の研究は、どうだったのか。ここでは、ヨン＆イェによる二つの研究を取り上げる。一つはHDB団地における近隣活動の分析（Yeung & Yeh1975a）、もう一つはウッドランドとHDB団地での生活時間の比較（同1975b）である。

HDB団地における近隣活動の分析で、ヨンらは、「一般的に健全な近隣が、シンガポールの団地には見られる」（同1975a: 279）と結論付けている。しかし、以上の結論を導く根拠は、「非調理食料の購入、小学校通学、衣料の購入の率が高く、．．．近隣施設は、住民に非常によく利用されている」（同 268）といった程度のことである。また、近隣活動は、様々な活動から成るはずだが、「近所付き合いの中で、社会的訪問の交換が友好的な近隣関係において最も重要である。したがって本稿では社会的訪問に焦点を当てる」と、根拠もなく社会的訪問に対象を絞り、60%以上の回答者が同階の隣人と社会的訪問を行っていることを重視する（同 272-274）。データをたくさん並べているが、結論を導き出すものではない。また、社会的訪問以外にも様々な近隣活動があることは、チャンが指摘した通りである。

一方、生活時間の比較の研究では、ウッドランドとHDB団地の住民に対して生活時間調査を行った。ここでは、いくつかの興味深い発見が見られる。例えば、ウッドランドの方が近隣で使う時間が多いのは予想通りだが、個人で使う時間も、ウッドランドの方が多い（Yeung & Yeh1975b: 319-320）。ここから、ウッドランドの意外と個人的な生活が浮かび上がってくる。あるいは、データだけを見れば、全体を通してウッドランドとHDB団地では時間の使い方にあまり違いがないことを読み取ることができる。しかし、本研究では、両者の生活の違いを強調することがテーマになっており、些細な違いばかりが強調され、肝心の共通性が見失われてしまっている。テーマに縛られることで、せっかくの興味深いデータが活かされていない。テーマに縛られるのは、ヨンらの二つの研究に共通していることである。これは、一元化時代のHDB研究の特徴と言えよう。

しかし一方で、編者のイェが「各章の見解・結論は、必ずしもHDBの公式見解を反映していない」（Yeh(ed)1975: vii）と断っている通り、チャンのように一元化からはみ出した研究も存在し、完全な一元化がまだ達成されていないこともまた、本書の特徴である[22]。

3－2．1985年の研究書

本書は、原稿執筆者が50人以上にも及び、編者以外は全員がHDBの職員である。彼らが12のチームを編成して各章を担当した。このようにHDBが全力を投入した結果、1975年の研究書と比べて統合性を増し、量だけでなく中身も濃いものになった。

例えば、チュアらの研究（Chua, Sim & Low1985）では、スンホク村からアンモキオ・ニュータウンへの人々の集団移転について、「縦断的調査法」を用い、移転の実態を詳細に明らかにした。スンホク村は、社会的に同質ではなく、「村に拘束されている者」と「拘束されていない者」等いくつかの下位集団から成り立っていた。村にいる時間の少ない後者までが、村に安心感を抱いていたのは、

[22]前節で取り上げたハッサンの研究書が出版されたのは1977年で、本書が出版された1975年よりも後だった。このこともまた、当時まだ一元化が進行中の過程だったことを示している。

「実際の社会的相互作用」よりもむしろ「環境に対する視覚的な馴染み」のためであった（同343-346）。団地への移転に対する適応では、複合家族が解体されることによって、複合家族に君臨していた年寄りの女性が疎外感を抱くことが予想された。しかし実際には、彼女たちは、ボイドデッキ[23]を基にネットワークをつくり、団地での新しい生活に適応していた（同362-363）。また、若い主婦は、団地への移転を歓迎する者が多かった。それは、大方予想されたように複合家族から開放されたからだけでなく、出身家族の成員との接触が増えたからでもあった。団地への移転によって、単に核家族化が進んだのではなく、新たな家族のネットワークが築かれたのである（同361）。また、団地での新たなコミュニティの形成では、小道や市場での団地住民の日常の何気ない出会いに注目し、「活動の通廊（corridors of activities）」という概念を打ち出した（同370）。

また、ウォン＆ウィらの研究（Wong, Ooi & Ponniah1985）では、HDB団地内におけるコミュニティの発達を取り上げた。団地の施設の利用を詳細に調べた結果、居住コミュニティのレベルで社会関係が存在していること、HDB団地に日常的な近所付き合いが存在していること、住民たちが自らつくりだしたインフォーマルな規範が存在することなどを明らかにした。そして、「HDB団地には、コミュニティ感情の発達する基礎はすでにあるのである」と結論付けた（同455-495）。

この研究では、先のヨン＆イェの研究にような論理の飛躍はなく、大規模かつ地道な調査に基づいた上で、結論を導き出している。とくに、コミュニティ感情について、「過去のコミュニティ経験」をも分析の視野に入れて、「場所と人々とに馴染みを強く持っているからといって、必ずしもコミュニティ感情をより強く抱いているとは限らない」ことを明らかにした。すなわち、「過去のコミュニティ経験」が豊かな住民は、コミュニティに対する期待が高くなり、たとえ実際にコミュニティ活動を活発に行っていたとしても、コミュニティ感情を抱くことはない。逆に、コミュニティに対してとくに期待していない住民は、実際にコミュニティ活動を行っていなくても、コミュニティ感情を抱くことがあるのである（同486-491）。ここから、現代社会の都市住民の複雑な心理の一端を垣間見ることができる。

その他にも、ウォン＆タンらの研究（Wong, Tan, Chew & Lai1985）では、団地での家族のライフスタイルについて、初期の家族、若い家族、成熟した家族、年取った家族の4段階に分けて、その違いを詳細に明らかにした。議論は平凡だが、一部屋の狭いフラットで大人数で暮らす場合の部屋割りの工夫の仕方、そこでより大きなフラットへの引越しを夢見る子供たちなど、細部に面白い点が多い（同438等）。

このように、1985年の研究書は、質・量ともに大幅に向上した内容となっている。しかし、一点だけ、向上されなかった分野がある。エスニシティに関する分野である。エスニシティに関してだけは、

[23]団地1階の空きスペース。団地住民の日常的な交流の場とすべく、HDBによってベンチやテーブルなどが設置されている。また、華人の葬式やマレー人の結婚式といった団地住民の諸行事にも用いられる。

十分に取り上げられていない。詳細なインデックスが6ページにわたってあるにもかかわらず、そこに、エスニシティや人種に関する項目は一つも存在しない。この点は、大いに疑問視されなければならない。

先に取り上げた研究で言えば、チュアらの研究でエスニシティに関する記述が見られるのは、スンホク村が華人村で福建人が支配的であることを説明している箇所と、団地に移転した人が、近所にマレー人と華人が住んでいることを発言している箇所の2ヶ所だけである（Chua, Sim & Low1985: 341, 361）。団地に移転させられた村民たちが、他のエスニック集団や方言集団とどのように関わっていったのか、全く触れていない[24]。ウォン＆タンらの研究では、エスニック集団別の違いが稀に取り上げられるが、比較の軸はあくまで部屋の大きさ、学歴、収入である。そして、ここで「ライフサイクルの各段階において、エスニシティの違いが際立っていたのは、主に近所付き合いの領域である」（Wong, Tan, Chew & Lai1985: 453）と、近所付き合いにおけるエスニシティ分析の重要性を指摘したにもかかわらず、近所付き合いを取り上げたウォン＆ウィらの研究では、「スペースの都合上詳細に取り上げることはできない」（Wong, Ooi & Ponniah1985: 461）として、エスニシティは全くと言っていいほど取り上げていない。住民のエスニック間関係については、ほとんど触れていないのである。

同じことは、先の1975年の研究書にも言える。チャンの分析のように、ウッドランドなど団地以外の地域の分析ではエスニシティを取り上げているが、HDB団地では取り上げていない。エスニシティや人種に関する語は、インデックスに登場しておらず、エスニック集団別の比較すら行われていない。副題で「A Multi-Disciplinary Study」と銘打たれているが、そこにエスニシティ研究は含まれていないのである。これは、エスニシティについて当然のように取り上げていた以前のHDB団地研究とは対照的だ。

以上のように、HDB団地研究の一元化によってもたらされた大きな変化は、エスニシティが語られなくなったことである。これは、エスニシティを取り上げることが重要でなくなったからではない。シンガポールのHDB団地研究においてエスニシティを取り上げることの重要性については、すでにハッサンが今後の課題として次のように述べていた。

> 「本研究では、こうした［エスニック間の］接触の質的な問題については解決できていない。HDB住民に関する将来の研究が、これらの問題を探求することを願う」（Hassan1977: 78）。

「一元化時代」において、エスニシティは、故意に避けられている。これは、「一元化時代」の最大の特徴である。このようにエスニシティがタブー化された状況について、ライは次のように記した。

> 「シンガポールでは、エスニシティ及びエスニック関係は、伝統的に、非常に微妙な問題だと見なされてきて、それを公に論じるのは、政治的エリートの特権だと考えられてきた。『コーヒーショップ・トー

[24]この点については、ライも指摘している（Lai1995: 45）。

ク」はたくさんあるのに、普通の人々の反応や経験についての記録はほとんどない。『微妙さ』のために、エスニック関係という潜在的に豊かな研究の脈が、未研究の分野のままである」（Lai1995: 19）。

しかし、こうした状況は、1980年代末頃から変化し始めた。この状況の変化について、ライは、次のように述べている。

「私が研究を始めた1986年末には、シンガポールのエスニック関係は、まだとても微妙な問題だと考えられていて、調査できなかった。それが、私がフィールドワークを始めた1988年末頃には、思いがけず、それについて公に議論できるようになっていた」（同vii）。

この頃から、シンガポールでは、政府のチャンネルに従っている限り、エスニシティについて発言することが可能になった。と言うよりむしろ、政府のチャンネルに従ってエスニシティについて発言することを、政府が積極的に推進するようになった。一元化の達成後、本稿冒頭で取り上げた「多人種主義」政策が、シンガポール政府によって全面的に展開されるようになったのである。シンガポール政府による一元化政策は、多元化（多人種主義）を完全に操ることで、ここで完成の域に達したと言えよう。すでに一元化されていたHDB団地研究も、この影響を直接受け、HDB団地におけるエスニシティについて積極的に論じられるようになった。HDB団地研究もまた、「多人種主義」時代を迎えたのである。

4．「多人種主義」時代（1990年代以降）の研究

一元化時代から「多人種主義」時代への変化が顕著に現われているのが、現在シンガポール社会学の第一線で活躍しているチュアの一連の論文である。先に取り上げたように、1985年の論文では、彼はエスニシティについてほとんど触れていなかった。それが、「多人種主義」時代においては、1991年の"Race Relations and Public Housing Policy in Singapore"や1998年の"Racial Singaporeans: Absence after the Hyphen"など、シンガポールの人種関係について積極的に論じるようになった。このことは、先の1985年の論文が、1997年の単行本（Chua1997）において、"Resetting Chinese Village: A Longitudial Study"と改題されていることからも見て取れる。「華人」村であることが強調されるようになったのである。

この時期のHDB団地研究の到達点は、HDB団地での本格的なフィールドワークに基づいたライの研究である。HDB団地における住民の日常生活を、本格的なモノグラフとして詳細に記した。最大の特徴は、団地住民の生活を、「華人」「マレー人」「インド人」「その他」を比較の軸にして描いていることである。4章で「特別な行事」として、「マレー人の行事」「華人の行事」「インド人の行事」「その他の行事」を順番に並べている（Lai1995: 65-87）ほか、日常生活を描いた部分でも、私空間の利用の仕方（同38-41）など、人種別の比較が分析の軸になった。

これによって、確かに、HDB団地住民のエスニシティ別の違いは、非常によく伝わる。しかし、

エスニシティ別の違いを超えた領域についてはあまりよく伝わらないという新たな問題を生み出している。これは、今後シンガポールのHDB団地に関する研究を行っていく上で、大きな課題となるであろう。

むすびにかえて ——「多人種主義」以後のHDB団地研究の課題

以上、シンガポールの団地研究について、主にエスニシティに関する議論に注目して取り上げてきた。初期の揺れていた時代の研究を本稿では二つに分けたが、1970年代後半以降それは一元化された。一元化の延長の結果が、現在の「多人種主義」時代である。

「多人種主義」が全面展開されている現在、シンガポールでHDB団地研究を行う場合、「多人種主義」の網から抜けるのは難しい。「多人種主義」は、一元化が延長・強化・完成された結果なのだ。「多人種主義」が人々の抱く素朴な差別意識・区別意識に根差していることが、こうした状況をさらに難しくしている。その結果、「多人種主義」の枠組みの中で多様性を論じるのは容易だが、「多人種主義」の枠組みの外で研究を行うのは大変困難になってしまった。この状況は、シンガポールで朝刊一般紙を買う場合を思い起こさせる。英語新聞・華語新聞・マレー語新聞・タミル語新聞の中から一紙を選択できても、英語のA新聞かB新聞かを選択することはできない。英語新聞は、A新聞一紙しかないのだ。本稿冒頭の例を用いれば、団地で「華人」「マレー人」「インド人」が隣り合って暮らしていることは指摘できても、その陰で人種割当て政策のために自分の団地を売れない家族の姿は、「多人種主義」の枠組みの下では、取り上げられず消却されてしまうのである。

それでは、「多人種主義」の枠組みの外で研究を行うには、どうすればいいのか。一つの方法として、アメリカやオーストラリアにおける多文化主義批判の議論をそのまま応用することがあるだろう。しかし、こうした議論に頼らなくても、「多人種主義」を乗り越えるヒントは、本稿で取り上げたシンガポールの団地研究の変遷にある。

かつて、ハッサンらによって、団地で住民が生活していくにあたって実際に抱える問題を重視する「嘆きのHDBフラット」の立場の研究（初期のBの立場の研究）が行われていた。この「嘆き」に、再び注目するのである。シンガポールの団地は現在「世界一の居住環境」などと称えられることが多いが、その陰で自らの生活を嘆く住民がいる。嘆きの一つは、自らの生活の場である団地が取り壊されることに対する嘆きである。

現在、シンガポールでは、「Sers（Selective En-bloc Redevelopment Scheme＝選択的全棟再開発計画）」の下、1980年以前に建てられた団地が政府によって次々と取り壊されている。この計画に指定された団地の住民は、新しい代替フラットを購入するか別のところへ移らなければならない。新しい団地に移ることを歓迎する住民がいる一方で、中には、長年住み慣れた団地が取り壊されることを嘆く者もいる。例えば、「Sers」に指定されたある団地に1956年以来住み続けている住民は、現地紙で

次のように語っている。

「私たち［住民］の中には、互いに40年以上知っている人もいます。．．．私は引越しに耐えられません」（The Straits Times 1996年5月1日）。

また、「Sers」に指定された別の地区の団地住民たちも、次のように語った。

「私はここに住んで20年になり、既にここに根付いています。もし選べるなら、ここにいます」（同1997年10月18日）。

「私の友人は皆ここにいます。私は毎日市場へコーヒーを飲みに行っています。それが今、市場も私も出て行かなければならないなんて．．．」（同1999年3月28日）。

20年さらには40年以上、居住してきたのだ。その間様々な出来事があったであろう。生活の場であり思い出の詰まった団地に、特別な感情を抱いても不思議ではない。そして、この特別な感情は、住民各個人が別々に抱いているのではなく、団地住民間で共有された「嘆き」となる可能性がある。

また、ここで引用した住民の言う「市場」とは、ホーカーセンター25のことである。団地だけでなくホーカーセンターも取り壊され、安くて美味しい日々の食事を供したホーカーセンターがなくなることを嘆く住民もいる。「新しく建て直されたところは、冷房が効いていて確かに清潔だが、値段が上がり味も落ちている」というのが、彼らの決まり文句だ。

しかし、現地のメディアでは、こうした団地住民の「嘆き」が取り上げられることは少ない。先に引用した三例は、非常に稀なケースだ。例えば、最近「Sers」に指定された団地に住む住民の声を伝える新聞記事は次のような調子である。

「住民のジョセフ・ハンさん（52歳）は、彼の住むブロックが昨日Sersに選ばれたことを聞くと、喜びの悲鳴をあげた。『長い間これを待っていました！．．．』」（同1999年10月30日）。

現地のメディアではこのような記事が大多数を占め、団地やホーカーセンター[25]の取り壊しを「嘆く」住民の姿は、ほとんど無視された状態にある。しかし、先に引用した住民たちの声からその一端が垣間見れるように、取り壊しを「嘆く」住民がいるのは確かだ。

こうした住民の姿を直視することに、「多人種主義」のもつ固定性を乗り越える種がある。長年親しんだ自らの生活の場が壊されることに対する「嘆き」に、人種別の違いはない。各人種とも、「嘆き」を発し共有するだけの共通の団地経験を既に長い間経ているのだ。あるいは別に嘆かなくてもいい。長年住んでいた団地生活や食べ慣れたホーカーセンターの味を懐かしむ気持ちで十分である。

「灯台下暗し」と言うように、これからさらにシンガポール研究を進めていく鍵は、不毛だと見なされがちなシンガポールにおけるシンガポール団地研究にあった。かつての「嘆きのHDBフラット」

---

[25]シンガポールの街角でかつて多く見られた屋台（ホーカー）を、政府は「近代化」「衛生化」のために、施設に集めた。この施設が、ホーカーセンターである。ホーカーセンターは、シンガポール人の日常の食事場所として定着している。

の立場の研究である。そこでは、団地のもつ大義名分よりも団地での生活の実態を重視した研究が行われていた。この立場にたち、「多人種主義」の下で唱えられる大義名分を敢えて無視し、団地の取り壊しを嘆く人々の実際の姿を直視し、人種の違いにとらわれずに共通の団地経験に注目することが、「多人種主義」時代のシンガポールでは改めて意味をもつ。こうした「嘆きのHDBフラット」の立場の研究を現在のシンガポール団地で実際に進めていくことが、今後課された課題となるであろう。

（本稿は、「財団法人 松下国際財団」の助成を受けた研究・「シンガポール『多人種主義』に関する比較社会学的研究」の成果の一部である。）

引用文献

Baharin, Syed, Dahlan, Badron & Vasoo, S., 1971, "The Impact of Public Housing on Malay Family Life, with Practical Reference to Toa Payoh", in Ahmat, Sharon & Wang, James (eds), *Malay Participation in the National Development of Singapore, Singapore*: Community Study Centre

Benjamin, Geoffrey, 1976, "The Cultural Logic of Singapore's 'Multiracialism'", in Hassan, Riaz (ed), *Singapore: Society in Transittion,* Kuala Lumpur: Oxford University Press

Chang, Chen-Tung, 1975, "A Sociological Study of Neighbourliness", in Yeh, Stephen H.K. (ed)

Chang, Yong Ching, 1970, "The Squatter Population of Singapore", in Berita Peranchang, 1-1

Chua, Beng-Huat, 1991, "Race Relations and Public Housing Policy in Singapore", in *Journal of Architectural and Planning Review*, 8

Chua, Beng-Huat, 1995, *Communitarian Ideology and Democracy in Singapore*, London: Routledge

Chua, Beng-Huat, 1997, *Political Legitimacy and Housing: Stakeholding in Singapore*, London: Routledge

Chua, Beng-Huat, 1998, "Racial Singaporeans: Absence after the Hyphen", in Kahn, Joel S. (ed), *Southeast Asian Identities*, Singapore: ISEAS

Chua, Beng-Huat, Sim, Julie & Low, Chay Wan, 1985, "Resetting Soon Hock Village: A Longitudial Study", Wong, Aline K. & Yeh, Stephen H. (eds)

Hassan, Riaz, 1969, "Some Sociological Implications of Public Housing in Singapore", in *Southeast Asian Journal of Sociology*, 2

Hassan, Riaz, 1976, "Symptoms and Syndrome of the Developmental Process", in Hassan, Riaz (ed), *Singapore: Society in Transittion*, Kuala Lumpur: Oxford University Press

Hassan, Riaz, 1977, *Families in Flats: A Study of Low Income Families in Public Housing*, Singapore: Singapore University Press

Lai, Ah Eng, 1995, *Meanings of Multiethnicity: A Case Study of Ethnicity and Ethnic Relations in Singapore*, Kuala Lumpur: Oxford University Press

李光一、1985、「エスニシティと現代社会：政治社会学アプローチの試み」、『思想』730

Lim, William S. W., 1977, "Review Article: Public Housing in Singapore", in *The Malayan Economic Review*, 12-2

MITA (Ministry of Information and the Arts), 1999, *Singapore* 1999, Singapore: MITA

Ooi, Giok Ling, 1993, "The Housing and Development Board's Ethnic Integration Policy", in Ooi, Giok Ling, Siddique Sharon & Soh, Kay Cheng, *The Management of Ethnic Relations in Public Housing Estates*, Singapore: Times Academic Press for The Institute of Political Studies

Powell, Robert, 1997, *Line Edge and Shade: The Search for a Design Language in Tropical Asia*, Singapore: Page One Publishing

PuruShotam, Nirmala, 1998, *Negotiating Language, Constructing Race: Discipling Differences in Singapore*, Berlin: Mouton de Gruyter

Tay, Kweng Soon, 1969, "Housing and Urban Values: Singapore", in *Ekistics*, 27-158

Treloar, E. E., Western, J. S. & Yeh, S. H. K., 1970, "HDB Tenant Survey 1968, Satisfaction with Housing: A Methodological and Substantive Analysis", Singapore: State and City Planning, *Technical Paper*, 43

Turnbull, C. M., 1989, *A History of Singapore 1819-1988* (2nd edition), Singapore: Oxford University Press

Western, John S., 1970, "The Role of the Sociologist in Development Planning", in Bandar, 2

Wong, Aline K., Ooi, Giok Ling & Ponniah, Rennis S., 1985, "Dimensions of HDB Community", in Wong, Aline K. & Yeh, Stephen H. (eds)

Wong, Aline K., Tan, Thomas, Chew, Soo Beng & Lai, Ah Eng, 1985, "Family Lifestyles among HDB Residents", in Wong, Aline K. & Yeh, Stephen H. (eds)

Wong, Aline K. & Yeh, Stephen H. (eds), 1985, *Housing a Nation: 25 Years of Public Housing in Singapore*, Singapore: Maruzen Asia for HDB

Yeh, Stephen H. K. (ed), 1975, *Public Housing in Singapore: A Multi-Disciplinary Study, Singapore*: Singapore University Press

Yeh, Stephen H. K. & Statistics and Research Dept.of HDB, 1972, *Homes for the People: A Study of Tenants' Views on Public Housing in Singapore*, Singapore: HDB, Economic Research Centre & University of Singapore

Yeung, Yue-man, 1970, "Viability of the Neighbourhood Unit in Singapore's Public Housing Estates", Bandar, 2

Yeung, Yue-Man & Yeh, Stephen H. K., 1975a, "A Review of Neighbourhoods and Neighbouring Practices", in Yeh, Stephen H.K. (ed)

Yeung, Yue-Man & Yeh, Stephen H. K., 1975b, "Life Styles Compared: Squatters and Public Housing Residents", in Yeh, Stephen H.K. (ed)

（なべくら　さとし・博士後期課程）

A Review of the Sociological Studies of Public Housing Estates in Singapore

Satoshi NABEKURA

This paper reviews the sociological studies of public housing estates in Singapore. Public housing in Singapore is of great sociological interest but is seldom taken up outside the country. This paper focuses on the issue of ethnicity in the context of public housing because, as a cornerstone of government policy, "Multiracialism" exerts great influences on the life of Singaporeans. This review shows that the multiple views in the earlier studies on housing have been replaced by a single, dominant view that, while praising racial "diversity", precludes diversity in itself.

This paper divides the secondary literature into three periods. In the first period, from 1960s to 1970s, the literature is dominated by two positions. The first position is that life in the public housing estates is generally good while the other position stresses the woes of the residents. With regard to ethnicity, the first position regards ethnic integration in the housing estates as successful whereas the other position finds ethnicity problematic. In the second period, from 1970s to 1980s, the predominant view is a favorable one. Moreover, the issue of ethnicity disappears from the literature even though it was one of the most debated issues in the first period. In the third period, from the end of 1980s till now, the issue of ethnicity reappears but is almost always treated positively. Ethnic diversity in the housing estates is seen as the most important achievement of the public housing policy. However, this exclusive focus on ethnicity means that other aspects of public housing have been overlooked. This is, I argue, a major weakness in the recent studies of public housing estates in Singapore.

To overcome this preoccupation of ethnicity, it is necessary to recover the kind of multiplicity in views characteristic of the first period. Not only is it necessary to reconsider the woes faced by the residents of public housings, but also to approach their problems from different angles. In this way, just like the diverse ethnic composition of the housing estates, the literature on housing estates will also become more diversified in term of topics chosen and positions taken.